

日本語の分析能力を養う中・上級文法授業の試み

—外国人日本語教師研修における実践—

木田真理・山本実佳

[キーワード] 中・上級文法授業、分析能力、外国人日本語教師、自律的、意識変容

[要 旨]

本稿は、外国人日本語教師 (Non-Native Teacher 以下、NNT) を対象とした中・上級の文法授業において、NNT が帰国後も自己の課題を認識し、自律的に日本語に向き合い分析する力を育成することを目標に行った授業の実践報告である。本実践では、日本語の分析能力を育成するために必要な要素を、「日本語の実態を客観的に観察し」「自分でルールを考え」「必要な情報を取捨選択し整理する」と考え、この3つの要素を取り入れ文法授業を実践した。分析能力育成の試みの中から、「調べ学習」「用例探索」「おもしろ日本語発見」について以下に報告する。そして、受講した NNT への質問紙調査から、分析能力育成の可能性を探った。NNT はこの実践を通して、主体的に活動することや協働することで、ある程度分析能力が高まったと評価しており、文法授業についてのイメージの変容も確認された。

1. 本実践の目的と背景

国際交流基金日本語国際センターでは、外国人日本語教師 (Non-Native Teacher 以下、NNT) を対象とした様々な日本語教師研修を実施しているが、その中に、若手日本語教師を対象としている研修期間6か月の「海外日本語教師長期研修」(以下、長期研修)がある。NNT は、日本語教師といえども、日本語学習者としてまだ中・上級の段階にあり、来日時のプレースメントテストで日本語能力試験 N2以上と判断されるのは、全体の半数に及ばないことが多い。長期研修では、JF 日本語教育スタンダードの6レベルのうち、B1レベルに満たない NNT 対象のコースを A コース、それ以上の運用力を持つ NNT 対象のコースを B コースとして、それぞれのコースのレベルにあった教授法と日本語授業を展開している。B コースのカリキュラムは、教授法の授業を100時間程度、日本語関連科目を200時間程度とし、日本語関連科目は、「口頭表現」「読解」「作文」「選択科目」に加え、「文法演習」(以下、文法授業)を設定している。教師でもあり学習者でもあるという二面性を持つ NNT を対象とする文法授業では、従来から、自身の運用力向上と教授能力向上の両面が必要とされるため、次の3点を目標として、実施されている。

- ・ NNT 自身の日本語運用力の向上を支える中・上級の文法知識を身につける

- ・初・中級の文法を整理し、分析的な視点を養う
- ・いろいろな文法の説明、練習の方法を経験することを通して、文法の教え方のバリエーションを増やす

NNT は、半年の研修終了後には、帰国して各自の教育現場に戻り、日本語教師として再び教壇に立つ。日本語に豊富に接する環境にない海外の現場では、日本語教師の同僚が少なく、中には、日本語教育機関の中で唯一の日本語教師である場合もある。多くの場合、何か疑問が生じても、誰かに教えてもらえる環境がなく、自律的に日本語学習および教授上の問題点に取り組まなければならない。

日本語国際センターの教師研修では、開設当初より、研修後は海外の現場に戻る NNT に対して、自己研修能力の開発に向けて研修プログラムを実施してきた。王他 (1995 : 33) では、自己研修の過程が成り立つためには、「自己の現状を意識化し客観的に捉える力、問題を認識する力、自律的に問題を解決する方法をさがす力などが必要となる」と指摘している。中・上級の文法知識を身につけることが目標の一つである文法授業においても、研修の授業で扱うことができる文法項目、文法知識には時間的制約からの限界があり、日本語の文法について考える力、疑問が生じた場合、自分で調べて解決する力など、自律的に日本語を分析する能力の育成が必要となる。

言語の分析能力について、向山 (2010) では、Skehan (1998) を参考に、「言語のルールを推論し、言語的な一般化をする能力」(向山 2010 : 61) と定義されている。自分でルールを考えさせるためには、日本語を観察して用例に多く触れるチャンスを与え、情報を整理させる必要がある。このことを授業に即して考え、本稿では、文法授業において分析能力育成の可能性を具現化するために必要な要素を、以下のように考えた。

- ① 日本語の実態を客観的に観察することができる
- ② 自分でルールを考えることができる
- ③ 日本語を運用するために必要な情報を取捨選択し、整理することができる

これらの要素が、中・上級の文法項目を扱う授業の中で実践されるためには、教師が文法項目の説明をし、練習問題を解かせるというタイプの文法授業ではなく、NNT が、自律的に、主体的に日本語に向き合い考える仕掛けを授業に取り入れる必要がある。本稿では、その仕掛けを取り入れた実践を報告し、NNT への質問紙調査を基に、中・上級文法授業における分析能力育成の可能性を考察する。

2. 文法授業全体の概要

まずは、文法授業全体の概要を以下にまとめる。2015年度実施の長期研修における文法授業の時間数は、週1回3時間、全16回で合計48時間である。

2.1 文法授業の対象者の概要

本実践を行った授業対象者は、2015年9月～2016年3月に実施された長期研修（総数51名）の運用力上位2つのクラス（Bコースの5クラスと4クラス）の23名で、海外の日本語教育機関（大学、中学・高校、日本語学校など）における教授経験が5年未満の若手日本語教師である。国籍とその人数を以下に記す。全部で18か国となる多様性に富む集団である。

モンゴル (1) カンボジア (1) タイ (2) フィリピン (2) ベトナム (1) ミャンマー (2) インド (2) スリランカ (1) 米国 (1) アルゼンチン (1) コロンビア (1) チリ (1) ウクライナ (1) クロアチア (1) ブルガリア (1) ポーランド (1) リトアニア (1) ロシア (2)
次に、対象者の日本語運用力の目安を表1に記す。

表1 日本語運用力の目安〔() 内の数値は人数を示す〕

日本滞在歴		なし (6)	6ヶ月未満 (8)	6ヶ月～2年 (8)	3年以上 (1)
ブレースメントテスト結果	旧日本語能力試験1～2級 タイプの筆記テスト	5クラス：2級試験：283～373点		1級試験：219～289点	
		4クラス：2級試験：187～302点		1級試験：131～256点	
	ACTFL OPI の判定	超級 (1)	上の上 (7)	上の中 (6)	上の下 (9)

2.2 文法授業全体のシラバス

授業では、特定の教科書を使用せず、そのクラスの日本語運用力に応じて、授業担当者が、NNTにとって必要と思われる文法知識は何かを判断し、授業内容を選定した。研修開始時点で「研修の文法授業で知りたいこと、学習者からの質問で答えられなかったこと」などについてのアンケート調査も、授業で扱う文法項目決定の判断材料とした。アンケートでは、概ね毎年同じような文法項目があがり、類似表現の使い分けについての質問が多数を占める。

本実践対象の2つのクラスにおいて取り上げた文法項目を表2に示す。

表2 2つのクラスで取り上げた文法項目

クラス	取り上げた文法項目
5クラスのみ	～んです 無助詞 省略 接続詞・副詞 日本語のコーパス 日本語のバリエーション（方言、役割語、世代差など）
4・5クラス 共通	指示詞 授受表現 条件表現 「は」と「が」 自動詞・他動詞 使役 受身 使役受身 ～ている／～である／ておく 敬語（待遇表現） モダリティ
4クラスのみ	比べてわかる中級表現（～がちだ／ぎみだ、～わけがない／わけではない、などの文法的な機能語）

3. 分析能力育成の試み

表2の文法項目を扱うにあたって、各回において分析能力育成につながる要素を取り入れた授業を行った。授業は、基本的には講義型ではなく、NNT 自らが気づき、考える授業をデザインしているが、本稿では、その中でも、自立的な行動が求められる「調べ学習」「用例探索」、そして、文法授業の最終課題として実施した「おもしろ日本語発見」について以下に報告する。

なお、その他の授業の詳細については、「国際交流基金 調査研究部会 2016年度上半期プロジェクト報告」の「モジュール型文法シラバス」⁽¹⁾を参照されたい。

3.1 調べ学習

この活動では、ある文法項目のテーマについて、授業前に、文法の参考図書や日本語学習用教科書の文法説明、また Web 上の情報などから、各自がその項目について難しいと思っていることを念頭に、必要な情報を調べて読み取り、その情報を持ち寄って授業に参加する。そして、授業では、グループでお互いに調べたことをまとめて、重要な文法ルールや用例等を発表し、クラスメートが行った説明や用例をシェアした。ここでは、4クラスで実施した「は」と「が」、条件表現(「と」「ば」「たら」「なら」)、話し手の気持ちをあらわす表現(「そうだ」「ようだ」「らしい」「っぽい」)について報告する。これら3つの項目は、NNT からの事前アンケートにおいて、使い分け等が困難であるとの記載があったものである。

この活動は、自分で調べて必要な情報を取捨選択し、整理してまとめることを通して、自ら考える力がつくと考え、前述した言語の分析能力のうちの、②「自分でルールを考えることができる」③「日本語を運用するために必要な情報を取捨選択し、整理することができる」のために実践したものである。それに加え、グループでまとめたことをクラス全体でシェアすることによって、新しい発見にもつながる活動であると考えた。

NNT が実際に調べ、グループで発表用にまとめた「まとめシート」を、1回目と2回目、そして3回目と比較すると、書き方や内容に変化が見られた。1回目の「は」と「が」では、「副助詞：話題」「名詞文、形容詞文の主語」といったカテゴリー（その文型の役割）の下に、例文が書いてあり、「が」や「は」に線が引いてあるだけのものが多く、主部、述部といった言葉がメモしてあるなど、形のみに注目しているものがほとんどであった（資料1-1参照）。2回目の条件表現になると、形の分析だけではなく、どんな場面で使えるのか、どんなニュアンスがあるのかまで考えながら、話し合いが行われており、それが、「と」「ば」「たら」「なら」が持っているそれぞれのイメージで色分けをする、それぞれの重なりを考えながら図で示す（資料1-2参照）、使えない場合の例を示すなど、まとめシートにも反映されていた。3回目の「話し手の気持ちを表す表現」は、NNT 自身から、この項目で調べ学習をしたいとの要望があり、さらに対象項目ではなかった「っぽい」も一緒に調べるとよいのではないかとの提案を受け、

実施した。「こんなニュアンスがあるのかも」「この表現の後ろにはマイナスの表現がくるのでは」などの話し合いがなされ、考える力がついてきた様子が担当者の授業記録からも見られた。NNTのまとめシートには、例外の記述、よく使われる表現、イメージ（ニュアンス）などが示されていた。

3回の調べ学習において、調べ方やまとめ方が、形のメモを中心としたものから、ニュアンスや場面に注目するようになっていったと思われる背景には、日本語を「文型」、すなわち言語形式の側面だけで捉えることのないように、各回の授業で繰り返し、文法の3つの要素に触れていたことがあると考えている。文法の3つの要素とは、Larsen-Freeman (1991: 280-282) に紹介されているもので、文法知識が、表現形式 (FORM) と意味 (MEANING)、その使い方 (PRAGMATICS) からなることが図²⁾で示されている。文法の「使い方」の面にも注目してこそ、実際のコミュニケーションの場で役立つ知識となることを、各文法項目を扱う授業の際に触れており、調べ学習においても、「使い方」の要素にも注目する習慣がついていったのではないかと考える。

3.2 用例探索

この活動は、日本語学習用の参考情報や例文ではなく、日本社会で実際に使われている用例を観察し、収集する活動である。日本での生活の中で使われている身の回りの用例を収集し、クラスで用例をシェアする活動と、日本語のコーパスを利用して用例を検索し、検索結果から、調べた表現についての理解が深まることを体験する活動である。前者は、前述した言語の分析能力の、①「日本語の実態を客観的に観察することができる」という点に焦点をあてた活動であり、後者は、コーパスの用例を検索して、検索結果を観察することで、①に加え、②「自分でルールを考える」③「日本語を運用するために必要な情報を取捨選択し、整理する」というプロセスが含まれている。以下にこれらの2つの活動の手順と成果について記す。

3.2.1 日本社会で実際に使われている用例の収集

敬語表現が使用されている様々な看板やポスター、デパートや交通機関のアナウンス、コンビニやホテルなどの接客の様子、テレビドラマの会話などを観察し、一人、3～5つ程度の用例を収集してくる課題を、4、5両クラスにおいて出した。敬語表現は、用例が収集しやすく、この課題を通して、ふだん何気なく見過ごしているレシートなどにも敬語が使われていることや、店の看板にこめられた店主のメッセージを発見するきっかけともなる。日本滞在中のNNTは、「客観的に観察する」仕掛けとしての課題を出されてみて初めて、日本語の用例に囲まれた環境の中に自分があり、日本語観察による発見ができることに気づくケースも多い。研修の前半にこの活動を行うことで、研修期間中、日本社会で実際に使われている日本語の観察をする習

慣を身に着けることを期待した。なお、実際に用例収集の課題を出す前に、敬語表現の知識の整理を行った。ほとんどのNNTは、敬語を、「尊敬語」「謙讓語」「丁寧語」の3分類で学習し、自分でも教えているが、文化庁のホームページの「敬語おもしろ相談室」⁽³⁾などを参考に、5分類で「対者敬語」の観点を持たせたり、コンビニやレストランにおけるマニュアル敬語の存在を知らせたりした。

NNTが実際に観察して収集した用例は、書かれた敬語表現と音声で聞いた敬語表現との両方があった。文型・文法シラバスの教科書で学び、自らも教えているNNTは、規範意識に敏感なため、教科書にのっていない表現について注目することが多い。マニュアル敬語を実際に観察したNNTの報告には、用例と共に以下の記述(原文のまま一部抜粋)が添えられていた。

・マニュアル敬語を実際に聞いて、おもしろかった。「おしぼりになります」というと、前にまだ「おしぼり」ではなかったかなと感じました。

・レシート「上記まさに領収致しました」:

領収書その物に話されていると不思議に思いました。誰がそのお金を領収したのは曖昧です。看板や領収書で使われている敬語は会社とお客さんの関係を表していると思いました。

このように、NNTの観察例からは、敬語を、教科書や問題集の中だけで学習するのではなく、実際の生活の中で使われていることを観察することにより、様々な発見をし、言葉の使い方にも注目していることが確認できた。

3.2.2 日本語のコーパスを利用した用例検索

この活動は、BCCWJ(現代書き言葉均衡コーパス)や、NLB(NINJAL-LWP for BCCWJ)などの日本語のコーパス⁽⁴⁾を紹介し、実際に使用してみて、どのような情報が得られるかを体験するものである。実際の用例を読みこなせる運用力を必要とすることから、5クラス(最上位クラス)のみで実施した。BCCWJ「少納言」の概要説明のあと、文字列検索でどのような情報が得られるのかを、コンピュータールームで実際にコーパスを使用して検索を行った。その後、冬休みの期間を利用してコーパスに親しみ、冬休み明けに、少納言または、NLBを使って、興味を持った表現について検索し、検索結果及び、わかったことを簡潔に報告するという課題を出した。提出された課題の内容の一部を原文のまま以下に記す。

・「大丈夫」の語を探してみました。日常生活で使うときに、ただ「良い」という意味だけではなくて、「要らない」「問題がない」などの意味もあると気づきました。それに、「大丈夫かもしれません」の形も少納言にも出ました。この使い方を初めて知りました。

・私が日本語を勉強し始めた時は教科書では「全然」はいつも否定形として使われると勉強しましたが、日本人の会話などで肯定形でも使われていることが分かり調べてみました。NLBで「全然」を調べたら、形容詞・動詞以外に副詞と一緒に使われていることが分かりました。

・英語だと LAN、は、文字一つ一つで読まないで、「ラン」と読みますので、日本語も同じく「ラン」の方がよく使われていると思いましたが、少納言を見ると、ローマ字の LANの方がよく使われています。

このような報告からは、NNT が大量の用例が表示されるコーパスの検索結果から、自分の知りたかった情報を取り出し、言葉の使用実態を調べることに成功していることがわかる。検索対象語を自分で決めるため、普段から日本語を観察し、疑問を持つ姿勢が求められる。そして、抽出された用例を様々な角度から分析して、疑問の解決のために必要な情報を整理している。この一連のプロセスでは、分析能力育成の可能性につながる要素が確認できると言えよう。コーパスは、帰国後、国においても利用可能であり、多数の用例を知ることができるため、語感をネイティブ並みに持つことが難しい NNT にとって、使いこなせるとよいツールである。NNT は、学習者として日本語について学び続けることも、また、日本語教師として、よりよい例文を学習者に提示することも必要であり、両面において、帰国後の自律的学習の支援となる。BCCWJ は、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築された均衡コーパスであり、Google や Yahoo などの検索ツールで検索することの違いについても解説を加え、均衡コーパスの価値を認識してもらい、利用を促した。

3.3 おもしろ日本語発見

次に、毎回の授業で意識して行った分析能力育成の集大成として、4、5両クラスで、文法授業の最終課題とした「おもしろ日本語発見」について、詳しく報告したい。

この活動は、各回の授業において新しく得た文法の知識、「調べ学習」や「用例探索」などの活動で養った、実際に使われている日本語を観察する態度、自分で情報を得て必要な知識を整理する方法などを総動員し、分析能力を発揮する機会と位置付けた。前述した言語の分析能力、①「日本語の実態を客観的に観察することができる」②「自分でルールを考えることができる」③「日本語を運用するために必要な情報を取捨選択し、整理することができる」をすべて含むものと考え実施した。文法項目を講師が定めず、自ら調べたい項目を決めて発表するため、自らの興味に応じてテーマを設定するスタートの時点から、自律的な態度が求められる。それまでの授業を踏まえて、言語をどのように捉えるかということも含めて、中・上級文法授業のまとめの活動として、帰国後も必要とされる、自律的に日本語に向き合い分析していく力の向上につながっていくと期待した。

3.3.1 「おもしろ日本語発見」の活動の指示

NNTには課題の発表会の1か月前に、表3のように発表の準備を指示した。

表3 発表会についてのNNTへの指示

授業の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の興味に応じて言語及び言語行動などのテーマについて観察、データ収集、分析、発見したことの整理をする。 ・伝わるように資料を用意し、発表する。
課題	興味を持った日本語表現（言語行動を含む）をとりあげて、実際の用例を集めて分析し発表する。（一人10分の発表と質疑応答5分 PPT使用）
発表内容	観察⇒発見⇒調査⇒分析⇒まとめ（発表） 1. 興味、問題意識：おもしろい！どうして？なぜ？不思議！ 2. 観察：日常生活の言葉や言語行動（音声、文字、文法…など） 3. 発見：いつ、どこで、だれが、どのような… 4. 調査・分析：実際に見たり、聞いたり、観察したり、調べたり… 5. まとめ：わかったこと、考えたこと

準備から発表までの「観察⇒発見⇒調査⇒分析⇒まとめ（発表）」のプロセスの中で、特に次のポイントをおさえて取り組むよう指示した。

まず、興味や問題意識に応じてテーマを決め、なぜ興味を持ったのか、動機や背景について述べる。そして、実際に使用されている日本語を観察し、いつ、どこで、だれが、どのような場面・状況でといったことを踏まえた上で、実際の用例をあげる。「調査・分析」では、参考となる情報を書籍やウェブなどからとることや、アンケートやインタビュー調査などの実施を勧めた。発表の「まとめ」では、その言語やその現象についてどのように考えたかなど、自分の意見、見解、感想を述べることにした。つまり、この活動で、NNTの分析能力が発揮できるよう講師側が意識したことは、NNTが自分でテーマを選ぶこと、また、実際に使われる日本語を観察して、様々な角度から考えること、得られた情報を取捨選択し、整理してまとめて報告することである。また、発表会形式にすることで、学びあいの要素や新しい気づきも生まれると考えた。

NNTが取り上げたテーマは、文法に関するもの、語彙に関するもの、言葉のバリエーションに関するもの、非言語行動に関するものなど、実に様々であった。以下、NNTが取り上げたテーマをその内容から「文法」「語彙・表現」「言葉のバリエーション」「非言語行動」「その他」に分類し、カテゴリー別に表4に示す。

表4 NNT が取り上げたテーマ一覧

カテゴリー	4クラス (12名)	5クラス (11名)
文法	<ul style="list-style-type: none"> ・「んです」 ・日本語動詞テ形 	
語彙・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・和製英語：日本人の変な英語？ ・カタカナ語、和製英語 ・猫の子猫（ことば遊び） ・畳語 ・日本のキャッチコピー 	<ul style="list-style-type: none"> ・外来語 ・Jポップの歌でよく出て来る漢字と表現 ・日本語で言葉を遊ぼう（語呂合わせ、川柳など） ・カタカナ語と意味が似ている日本語の使い分け
言葉のバリエーション	<ul style="list-style-type: none"> ・「ウ形容詞」（違かった） ・若者敬語「○○っす」 ・若者たちのカタカナ語 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の方言 ・おもしろ日本の方言 ・男性女性言葉遣い ・ら抜き言葉 ・外国人がよく使う口癖の現象
非言語行動	<ul style="list-style-type: none"> ・あいづち上手は聞き上手！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・LINE スタンプ分析
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・国語に関する世論調査：敬語について 	<ul style="list-style-type: none"> ・インタランゲージ（第二言語習得理論から見た誤用の背景）

この中から研修参加者 A 「LINE スタンプ分析」と、研修参加者 B 「日本のキャッチコピー」を取り上げ、発表内容と発表会の様子を紹介する。

3.3.2 発表例と発表会の様子

研修参加者 A が「LINE スタンプ分析」を発表テーマとした理由は、SNS の中でも日本とタイでユーザーが多い LINE を使い始め、スタンプの種類が多いことから興味を持つようになったからだという。LINE のスタンプは、言葉を使わなくても、自分の気持ちを相手に表すことができるため非常に便利であり、また、日本文化も勉強できるので面白いと感じているそう。いろいろな種類のスタンプから、言葉遊び、四字熟語、駄洒落、川柳（短歌）がそえられているスタンプを紹介した。例えば、動物のサイの絵に「ゴメンなサイ」の文字がそえられているもの、謝罪する図柄と共に「平身低頭」、カレーの絵と共に「おつかレー」、「ここで一句」と書かれた和風カードの中に「なぜかしら あなたの返事 まだ来ない」などのスタンプの例である。これらのスタンプを分析することによって、「LINE のスタンプの利点はまず、伝わらない気持ちを相手に伝えることができる。それから感情で会話をすることで非言語コミュニケーションでも相手と密着な関係が作れるとわかった。LINE のスタンプで様々な喜怒哀楽やシチュエーションを表現し、文字では伝達しにくい感情を相手に送ることができる」とまとめた。さらに、LINE 株式会社広告事業部の「LINE 2015年4-9月媒体資料」を、ウェブ上から探し出し、送信数やユーザーの割合を紹介し、日本人の「生活インフラ」として

定着している実態にも触れた。発表後の質疑応答では、LINEのスタンプのような手段で、感情を伝えた経験のないNNTが、ぜひ使ってみたい、国にもこのようなスタンプがあるとよいなどのコメントを寄せていた。

研修参加者Bが、「日本のキャッチコピー」を発表テーマに取り上げた理由は、文法の使い方などが勉強になるだけではなく、短い文章の中で人を感動させられることがわかり、面白いと感じたからだという。キャッチコピーの歴史を調べることに加えて、次のような様々なキャッチコピーを取り上げ、そこからどのようなことが読み取れるかを分析した。

- ・1946年に発売された化粧品のキャッチコピー「アメリカ好みの化粧品」：この時代には、アメリカ製に日本人が憧れており、「アメリカ好み」という言葉を使ったのではない
- ・「和食は和色でできている」：日本の食文化や色のバランスを大切にしていることがわかる
- ・「友だちと上って恋人とおりてきた」：すぐには意味がわからなかったが、文法がわかると、短い文でできたドラマのように思った
- ・「鍋ドン」：男でも料理ができるイメージ、流行の言葉や短い言葉を使うことで、印象や関心を引くことがわかった

そして、研修参加者Bは、数々のキャッチコピーを読み解く中でわかったこととして、日本のキャッチコピーは、「言葉遊びの要素がある、日常会話がよく使われている、読み手への語りかけとして疑問文が使われている。ネガティブな言葉も良いイメージへと変えることができる、ストーリー性がある」とまとめ、「キャッチコピーを読むことは、単語や文法を学べるだけでなく、その時その時の日本の社会や日本人の考え方も読み取ることができるのではないか」と意見を述べた。

3.3.3 「おもしろ日本語発見」の発表の成果

筆者らは、このような発表会を最終課題として設定することで、分析能力を育成する要素、すなわち、①「日本語の実態を客観的に観察することができる」②「自分でルールを考えることができる」③「日本語を運用するために必要な情報を取捨選択し、整理することができる」が実現された可能性があると考えている。NNTは、おもしろ日本語発表会の準備のプロセスにおいて、実際に使われている日本語を詳細に観察している。例えば、「LINEのスタンプ分析」の発表においては、スタンプの全貌を把握し、種類を調べ、分類する作業を行い、その中でも、言葉遊び、四字熟語、駄洒落、川柳（短歌）など、日本語表現と関係の深いものを選び紹介している。そしてスタンプを言語行動として捉え、言葉の使い手としての立場から利点をまとめている。「日本のキャッチコピー」の発表では、キャッチコピーの歴史を調べ、自分でも用例を収集している。そして、短い文でつくられているキャッチコピーを、文法や語彙の面から分析し、意味を解釈するだけでなく、日本文化の側面からも観察している。このような一

連の活動の中で、講義を受講するタイプの授業では得られない分析能力が育成できる可能性があると考えられる。

また、活動の指示を、「興味を持った日本語（言語行動を含む）」をテーマとして選ぶこと、「実際の用例を集めて分析すること」としたため、NNTが自ら選んだテーマは、「文型・文法」に限定されていなかった。「若者敬語」「若者たちのカタカナ語」などの、同世代の日本人の若者の使用する日本語表現に注目したもの、「日本の方言」「男性女性の言葉遣い」など、日本語の位相に注目したもの、「ら抜き言葉」「Jポップ特有の漢字と表現」など、言葉の規範からはずれる日本語表現などに注目が集まった。しかしながら、この点を筆者らは、肯定的に評価している。なぜならば、日本語を文型として捉えることが多いNNTが、言葉の使い手の立場から日本語を観察し、言語の捉え方が広がった可能性があるとして解釈できるからである。例えば、「LINEスタンプ分析」では、非言語行動にも注目し、日本語そのものだけでなく、日本人の生活の中での使われ方にも言及していたし、「日本語のキャッチコピー」では、日本社会や日本人の考え方も読み取ることができるとまとめていた。このようなことから、言語を使用する面に意識が向いた上で、観察、分析することが実践されたと考えることができるのではないだろうか。

4. 授業に関する質問紙調査結果から見えてきたこと

今回報告した分析能力の育成に焦点をあてた文法授業を通して、NNTは、分析能力が養われたと評価したのであろうか。また分析能力向上のために実施した活動を、どのように捉えていたのであろうか。研修終了時に、文法授業に関する以下の3点の質問紙調査を行った。

- 1) 文法授業の目標の一つであった「初・中級の文法を整理し、分析的な視点を養う」ことができたかどうかの自己評価（4段階評価）とその理由
 - 2) 文法授業で学んだこと、考えたことなど、授業についての感想
 - 3) 「おもしろ日本語発見発表会」、「日本語のコーパス（5クラスのみ）」についての感想
- 得られた回答から、文法授業における分析能力育成の可能性を見ていきたい。

なお、資料2に、分析能力に関する記述が比較的多かったNNT3名の質問紙の記述を、関連箇所を中心に抽出し、原文のまま示す。下線と太字は、特に分析能力に関係が深い部分を示す。

4.1 分析能力に対する自己評価

分析能力に対する自己評価については、23名中、「達成された」が19名、「まあまあ達成された」が4名であり、すべてのNNTが概ね達成したと評価していることがわかる。達成したと考える理由としてあげられた記述の一部を原文のまま以下に示す。

- ・グループワークの活動で自分が調べたことをまとめて、皆の前で発表することもできるし、

毎回の授業でクラスメートと意見交換を積極的に参加できる (カンボジア)

- ・最後の課題を通して、日本社会で身につけた面白い日本語を分析し、考えたり、発表したりすることもできた (カンボジア)
- ・先生の説明を聞くのではなく、様々な活動を通して、自分で考えたり、観察したり、調べたり、まとめたり、発表したりした上で、自分の頭に少しずつ文法の整理や文法の分析ができるのではないかと思う (タイ)
- ・先生の授業を受けるだけではなく、自分でも色々調べたり、グループと話し合ったりもしたので、色々なニュアンスも分かるようになったと思う (インド)

ここからまず、一部の NNT は、文法授業は教師の説明を聞くといった受動的なものだと考えていたことが推察される。そして、そのような教師主導ではなく、「自分」で「考えたり、観察したり、調べたり、まとめたり」といった学習者の主体的な活動と、「グループで話し合う」といった協働的な活動を通し、「分析的な視点を養う」ことが達成できたと評価していることがわかる。

4.2 文法授業全体における分析能力に関連する記述

次に、2)「文法授業で学んだこと、考えたことなど、授業についての感想」から分析能力に関する記述を取り上げ、まとめたい。分析能力に関する記述は11件見られたが、その中でも、「似ている文法・表現は比べながらその文法・表現のニュアンスや特徴をもっとわかりやすくなると思う (タイ)」といった、2つの形を比べ、言語を比較することが分析能力に通じていると考えているものが多く見られた。また、「その文法の意味だけではなく、関係がある場面や文脈の視点も身につけた (カンボジア)」や、「面白日本語発見で日本語を無意識に勉強することではなく、気付かせるようになり、分析能力が上がったと感じた (ミャンマー)」といった意見も散見された。これらの記述から、言語の比較が分析能力に通じるということだけではなく、自分で考え、観察し、必要な情報を整理することが、分析能力につながったと捉えていたということがわかる。

4.3 文法授業に対する意識変容の記述

分析能力育成を目標の一つとして掲げた文法授業を通し、文法授業に対する NNT の意識の変容がうかがわれる記述が、質問紙調査の各項目に見られた。一部を原文のまま以下に示す。

- ・自分で文法の発見をするのが一番効果的ではないか (ウクライナ)
- ・普通の講義ではなくて、学習者も色々なことを考えさせたり、調べさせたりしてしまいましたから、面白かった (ウクライナ)
- ・いつも先生が教えるんじゃなくて学習者にも自分で情報を探して自分で勉強するチャンス

をあげるのはとても大事だと思った。学生を自分でやってできたという気持ちにさせるのはとても大事だと思った（インド）

- ・「分析的な視点を養う」というのが教師としても学習者としても、自律学習にも欠かせないことだと私 생각합니다（チリ）

研修参加のための申請書や、研修参加前の事前調査からは、NNTは、学習者だった時に、自国での文法授業を教師主導の講義形式で受け、また、教師になってからも、そのような授業を行っているケースが多いことがうかがわれる。しかし、そのようなタイプの授業ではなく、「自分で」発見することや、「自分で」情報を探すといった主体的な活動を重要であると評価し、この活動を通して、「自分でできる」という実感が、学習者の達成感を持たせることにもつながるのだと体感したことが見て取れる。これらの記述からは、分析能力を駆使した文法授業を通して、言語の見方や文法授業に対する意識が変容した可能性が示唆された。

5. まとめと今後の課題

本稿では、NNTを対象とした研修の文法授業において、自律的に日本語に向き合い分析する力をつける必要があると考え、分析能力育成を主眼とした授業を実践し、その報告を行った。文法授業において、分析能力育成の可能性を具現化するために必要な要素を、「日本語の実態を客観的に観察する」「自分でルールを考える」「日本語を運用するために必要な情報を取捨選択し、整理する」と考え、文法項目を扱う際にこれらの要素を取り入れた授業を行った。NNTは、この実践を通して、主体的に活動することやグループでの話し合いなど協働することで、分析能力がある程度高まったと評価した。言語と言語を比較することだけでなく、自分で考え、観察し、必要な情報を整理することが、分析能力につながっているという気づきを得たケースも見られた。さらに、言語の見方や文法授業に対する意識が変容した可能性が示唆された。

次に今後の課題を述べる。今回は、分析能力について、NNTの授業に関する質問紙のみのデータを考察したが、分析能力が向上したかどうかを客観的に測る手段を検討する必要がある。また、分析的な視点を持つことにつながる知識やスキルはどのようなものか、どのような文法項目において、分析的な視点を養う訓練を効果的に行えるのかなど、さらなる検討が必要である。さらに、研修終了時点では、「分析能力がついた」という意識を持ったNNTが、帰国後、どのような課題にぶつかり、それをどのように解決していったのかなどについてのフォローアップ調査も必要だと考えている。

[注]

- ^①国際交流基金日本語国際センター調査研究部会 2016年度上半期 調査研究プロジェクト
「長期研修 B コースにおける文法授業のシラバス作成-JFS との関連性からの再考」
「モジュール型文法シラバス参照」
<http://www.jpf.go.jp/j/urawa/about/world/k_project_2016k-2.html> (2017年11月21日)
- ^②文法授業では、国際交流基金 (2010) でも紹介している Larsen-Freeman (1991: 280-282) の図を何度も示し、「使い方」の知識にも注目するように伝えている。
- ^③文化庁の「敬語おもしろ相談室」では、敬語に関する動画や解説が見られる。
<http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/keigo/index.html>
(2017年11月21日)
- ^④授業では、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ) の「少納言」及び、「NLB」(NINJAL-LWP for BCCWJ) を紹介している。NLB は、BCCWJ を検索するために、国立国語研究所とLago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムで、名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できる。

[参考文献]

王崇梁・大関真理・笠原ゆう子・古川嘉子・山口薫 (1995) 「教師の自己研修能力の開発に向けて—海外日本語教師長期研修における教育実習指導—」『日本語学』第14巻7号、33-42

国際交流基金 (2010) 『国際交流基金教授法シリーズ 第4巻 文法を教える』、ひつじ書房

向山陽子 (2010) 「言語適正と第二言語の会話能力との関連—会話能力を予測する適正要素は何か—」『言語文化と日本語教育』39号、67-89

Larsen-Freeman, D. (1991). Teaching Grammar. In Celce-Murcia, M. (ed.), *Teaching English as a Second or a Foreign Language*, pp. 280-282. Boston, Mass : Heinle&Heinle.

Skehan, P. (1998). *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford : Oxford University Press.

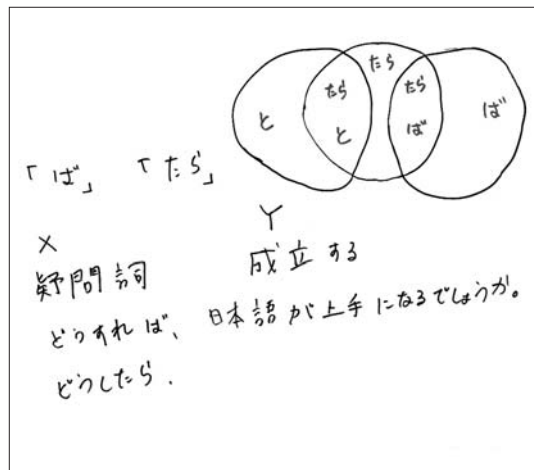
資料1-1

調べ学習1回目 まとめシート「はとが」

は	が
* 副詞助詞 * 主語; テーマ 例: この件は田中さんが担当しています。 主語	* 格助詞 * 主語 例: この件は田中さんが担当しています。 主語
* 例: 料は田中です。(料金は) いくら? 省略できる	* 例: 料が田中です。(料金が) いくら? 省略できない (重要な情報)
* 疑問詞の前 例: これは何ですか。	* 疑問詞の後 例: 何がはいですか。
* 比べの目的 例: (A)と(B)はどちらがよいですか。 比べる。	* 気づいたこと 例: バスが来た! だ * 感情や能力を表す言葉 (嬉しい, 得意) 例: 魚が泳いでる

資料1-2

調べ学習2回目 まとめシート「と、ば、たら、なら」



資料2 質問紙調査結果 (NNT3名の質問紙調査の記述とその抽出箇所)

名前	学んだこと、考えたこと、感想	分析能力が伸びた理由	「おもしろ日本語発見」発表会の感想	
研修参加者 ^a	<p>文法演習の授業を受けて、教え切れなはいいろいろな勉強になりました。その文法の意味だけではなく、関係がある場面や文脈の分析の視点も身につけました。やはり教師としては文法その意味を説明して終わりではなく、文の文脈や言葉のゆれとみかもっとも広い知識を持つべきだと考え始めました。そのために、毎回の授業ではみんな前で意見を交換したり、ツアーしたりできるともよかったです。そして、先生がいろいろな活動を取り入れ、毎回の授業で盛り上がりました。帰国後でできるだけ、文法授業で学んだことや体験したことなどを積極的に活躍していきたいと思っています。</p>	<p>その理由は時々グループワークの活動で自分が調べたことをまとめ、皆の前で発表するところもできて、毎回の授業でクラスメートと意見交換を積極的に参加できました。また、最後の課題を通して、日本社で身につけた面白い日本語を分析した、考えたり、発表したりすることもできました。</p>	<p>自分自身で観察したり、調べたり、分析したりするのはとてもよかったです。そして学習者がそれぞれ自分が調べたことを皆とお互いにツアーしたりすると、たくさん勉強になりました。また、調べた際、学習者にとってもいろいろいるな活動や工夫を考えなきゃいけないので、とてもいい勉強の方法だと思っています。</p>	<p>*表内の記述は原文のまま</p>
研修参加者 ^b	<p>文法演習の授業で学んだ後は、教師として色々な役に立つことができたりしました。まずは、言語知識に関することです。意味が似ている表現、文法の使い分けや文法のニュアンスなどよく整理できたり、分かるようになりました。前は、「助詞」、「条件表現」、「敬語、待遇表現」及び「話し手の気持ち表現」というのは全部勉強したことがありますが、文法演習の授業でその文法・表現についてもっと整理できると感じます。</p> <p>文法の知識だけでなく、教え方や活動も参考できると思っています。学んだことを工夫すれば自分の授業にも取り入れてみたいと思います。文法演習の授業で自分で体験した後、色々な教え方も学びました。例えば、似ている文法・表現は比ぶながらその文法・表現のニュアンスや特徴をもっと分かりやすく思っています。そして、ディクトグロスの活動ももう一つのいい方法で、文法も勉強できるし、聞く練習もできます。更に、自分で観察して発見したことについて発表させたり、グループで似ている文法の違いについて発表させたりする活動ももう一つのいい勉強だと思っています。その教え方と活動は自分の授業にも工夫を取り入れたいと思います。</p> <p>先生、色々お世話になりました。様々な教材やサイトや資料など紹介して頂いて参者になりました。6ヶ月、どうもありがとうございました。これから、私はもっと頑張ります。</p>	<p>前は文法を学んだとき、よく先生の説明を聞いていただけでした。だから、自分の頭に似ている文法などあまり整理をしなかつたです。今回、文法演習の授業では、先生の説明を聞くのではなく、様々な活動を通して自分で考えたり、観察したり、調べたり、まとめたり、発表したり、した上で自分の頭に少しずつ文法の整理や文法の分析ができるのではないかと思います。</p>	<p>この活動は、自分が興味を持って自分で観察したり、調べたり、考えたり、分析したりしたのはとても勉強になったと思います。自分が関心を持っているテーマについて調べるので、とても楽しく調べました。また、自分で調べたとき、色々な発見や勉強もできました。更に、友達の発表を聞いたとき、とても面白くて、色々な表現を勉強できて、参考にになりました。そのようやり方は自分の文法の授業にも取り入れて見たいと思います。</p>	<p>*表内の記述は原文のまま</p>
研修参加者 ^c	<p>文法を教える時には意味、形、場面を教えることは大事ということが分かるようになった。文法授業の教え方(四コマ漫画、演劇、ジェスチャー、リアリなど)を使って教えることも勉強になった。一番印象に残ったのは面白日本語発見で日本語を無意識に勉強することではなく、気付けさせるようになり、分析力の上がったと感じた。クラスメートの発見にも興味を持つようになりこれからはもっと研究したい気になった。本当に役に立つ良い授業だと思う。</p>	<p>文法授業に対しての私の視点が変わった。初級中級の文法も整理できて、学生にどう教えた方がいいか、どうのよう説明したらいいかも分かるようになった。その上、且日本語を分析して面白い発見もできたと思</p>	<p>日本語に関心が深くなり、これからも色々なテーマで研修したい気になった。</p>	<p>*表内の記述は原文のまま</p>

